## 1. 家をとりあげることの意味と視角

松本通晴（同志社大学）

大会課題報告について、その後に思いついたことの一、二を気楽に感想として申し上げることにします。

一、「日本資本主義と家」という課題について、すでに高山さんによって、前年度の研究会及び大会報告から論点がいくつか整理されているのを読んで、それでもその論議を集約させることがいかにむつかしいかをつくづく感じさせられました。あわせて研究会の報告からの問題提起と、大会報告を素材としての論議との間には、多少のずれのあるようにもみうけられました。それで切角の研究会からの問題提起が大会の論議の素材となり、生かされるように工夫できないものかと思うのですが、如何がなものでしょうか。

一、その場合、課題との関連で、私などには、何故現在、家が大会の課題報告として取り上げられて、しかも二年連続で取り上げられるのか、という問われ方が大会の論議においてもあってよいように思うのです。戦後の農村研究のひとつの中心であった家ないし家族主義の問題が、大きな成果を生みだす素材でありましたが、その後にそれが種々の形で継承されつつも、特に村研大会の課題として登場するまではかってのようではなかった。それで再び大

きく取り上げられたのは、そこに当時とは違った別の問題をかかえつつも、またそこに見過すことのできない共通の問題が横たわっているからだと思うのです。それで可能ならば、かかる意味で、戦後の家研究史から問題を出していただけたらと思うのです。

一、このことを受けて、戦後の農漁村の家調査の報告をお願いしたいと思うのです。しかしそこにおいても、家を取り上げることの意味と、家を現代において取り上げる視角とを出していただいたらどうでしょうか。たとえば私などには、家の変動という視角から既存の文献や調査データを読み取り、整理する中で、ひとつの展望が得られはしないかとひそかに思ったりするのですが。

一、更に来年度の課題についても意見を求められたのですが、実はそこまでまだ考えが到っておりませんので、思いつきということになってしまいます。それでもひとつの話題提供ということになればと思い、書き添えます。

それはここしばらくの間、むらの解体であったり、農村の都市従属、家の問題というように、家や村が資本や政治の下に解体に向けられた方向での追跡が中心であったように思いますので、もちろんそこにはまだまだ煮つめなければならない問題が多く残されているけれども、ここらで一度、むらを形成の視点から、ないしはむらを改造の視点からむらを改造しようとしてきたことの農民の試みを浮び上がらせることによって、むらをもう一度検討してはいかがなものでしょう。それはさらに、むらをもっと広い場で捉えるという問題へと発展すると思います。

以上、思いつくまま書き記しましたので、充分な形をとりえないことはいうまでもありませんが、そのことをどうかお許し下さい。